

■第四章 「場」をめぐる現状■

1 家庭

団塊世代が子育てを始めた七十年代半ば以来、日本の家族関係は大きく変化した。その頃、団塊世代の家族は「ニューファミリー」と呼ばれた。パパもママも子どもたちも揃ってジーンズといったイメージだった。今見ればごくありふれた風景だが、これは純粋戦後世代が作った非家父長制的な新しい家族像の典型だったのだ。

一九五〇年以前にはおおむね7割が見合い結婚で、恋愛結婚とされるものも本人の父や兄、職場の上司といった仲介者によって引き合わされたことから短い恋愛期間を経て結婚に至るといふ「見合い恋愛」婚が多かった。一九六十年代前半に恋愛結婚が見合い結婚を上回るようになり、団塊世代が結婚年齢に達している一九七三年には62.3%と恋愛結婚の優位が定着した（現在ではおよそ9割が恋愛結婚である）。

新しい家族像の担い手としてさっそうと登場したニューファミリーだが、ジーンズ以外のことはなかなかできなかったことも事実だ。自

分たちを育てた大正世代の親への反発から、ああはなるまいと、家父長制的な家族関係を否定したもの、その代替案はあまり明快にはならなかった。

この時代以来、日本の家族関係はリジッドなモデルを失い、その時々で互いにより不快感を与えないようにするという程度の方針しかもたない、非常に流動的な関係に変化した。家族関係は頑丈な構造を失い、一種の「こわれもの」になったのだ。お互いがこわれないうちに細心の注意を払っていないと、いつでも簡単にバラバラになってしまう可能性は、むしろものとなつた。実際にこわれてしまう家族関係もあるが、多くの家族は互いに気をつかい合い、あまり波風をたてないように工夫するようになつた。

構造が頑丈なら、たとえ深刻な意見の対立があつても家族関係はゆるぎないが、定型を失い「こわれもの」になった家族では、それを包み隠す必要がある。

最近の夫婦関係が「こわれもの」だというのは誰しも感じることだろうが、血のつながりを軸にした家族関係も本質的には同じなのだ。いまや誰も血のつながりに特別な意味を感じなくなつたからだ。

こういう家庭で育つた第一世代が、一世を風靡した「コギャル」たちだったわけだ。巧みなウチ、ソトの演技分けのテクニクが、

援助交際と円満な家庭とを両立させた。団塊世代の親たちは、それでもなお、家族の一体感を作り出そうとした。それは、彼らは古い家長制的家族関係を体験し、そのうえで嫌悪はするものの、それがあわせもつ家族関係の一体感には深い郷愁を感じるからだ。団塊世代が作った家族関係は「ジーンズ・ファミリー」や「アウトドア・ファミリー」のような新しさと同時に、意外に古臭さもっている。専業主婦率が高く、夫婦関係がやや夫婦随型。夫は典型的な企業戦士。団塊世代の親たちもつ家族の一体感への郷愁が、構造はグズグズだが、昔風の家族らしい外面を整える働きをした。子どもたちは思春期を迎えると、そういう親を傷つけないように細心の注意を払うようになったわけだ。

これに対して、ポスト団塊世代は、一言で要約すれば「都市化後育ちの第一世代」である。団塊世代のように人間同士の連帯感や集団の一体感に郷愁を感じるものがほとんどない世代だ。高校生頃に、団塊世代の連帯志向の若者文化に逆に「連帯のリスク」を感じとり、そこからいかに距離をおくかというテーマを軸に、新しいタイプの若者文化を組み立てた世代と言える。それが後の新人類文化の基礎となった。

だから、その世代が作った家族関係は、より薄味で、より「こわれやすい」ものになった。

た。一層、家族関係を表面的に円満に保つづかいが必要となった。血のつながりはあるが、実感としては、偶発的な同居生活というところだろう。日本の家族関係は、江戸中期頃からつい先だってまでの家長制的なものから、あつというまに、ルームメイト的なものに変化したのだ。もはや、子どもだけではない、親でさえ家族の一体感にほとんど何の感概ももたなくなつた。

「ルームメイト家族」にあつては、子どもに厳しいしつけをすることよりは、円満な家族関係を維持することの方が優先順位の高い課題とせざるを得ない。親子が本音をぶつあうことなど、とても怖くてできない。

かつては「子どものしたことは親の責任」という感受性にリアリティがあつた。子どもという人格は親の人格の延長上にあつたからだ。立しな。ルームメイトが悪事をはたらいたところ、誰が責任を感じるだろうか。

かつて、家庭は子どもの逸脱行動を防止する機能を多少なりとももっていた。問題行動を起こす子どもを見ると、家庭に何か問題があるのではないか、という連想が働くのはそのためだ。しかし、そういう防止機能はもはやあまり期待できない時代になった。対人関係についてのテストは後に続く新人類世代も同じであることを考えると、この状況はし

ばらく変化しないだろう。結局、家族の間でも、社会に対して連帯責任を負うのは無理で、自己決定／自己責任というところに行かざるを得ない。中教審の第一次答申にも「家庭の教育力の低下」という指摘があるが、「場」の絆を失った家族に教育力をはじめとする、なにがしかの強制力を期待することは非常に困難な状況にある。

すでに「場」としての独立性を失いつつある家族関係は、従来の日本の家族像とは対照的なルームメイト家族を生み出した。それはそれで、家庭の内部にある種の安定した関係を保たせてはいるが、社会全体の中に、家庭の「場」機能を前提としたシステム―例えば家庭の教育力を前提とした少年法や、老親扶養の倫理に期待する老人介護システム―が残存するために、あちらこちらで様々なコンフリクトを起こしている。コギャルたちの親はおおむね団塊世代、酒鬼薔薇事件で注目を浴びた十四歳という年齢層の親は、おおむねポスト団塊世代である。すでに家庭では「場」の論理をあまり体験していない世代が若者になりつつあるわけだ。

2 学校

学校は家庭と比較すると状況がやや複雑だ。家庭は程度の差はあるものの、おおむね次第に「場」的な関係を薄める方向に進んできた。学校は、骨身にまで染み込んでいる学校文化に「場」的な要素が含まれている。その「場」的要素が「学校らしさ」であるという感覚が広くもたれている。そこで、校内暴力やいじめや援助交際など、何か学校で問題が浮上すると直ちにその処方箋として学校の改善が要求される。その原因が本当に学校にあるかという検討はバイパスされ、何か対策を社会に對して提示してみせることがさしあたりの急務となる。このため、突如「場」的な関係が強化されることがしばしばある。校門での声かけ、クラスが心を一つにすること、みんな話しかうこと、教師が親身になって生活指導をすること、などなど。これは原因の一つでしかないが、様々な要因によって、学校は今の社会でも非常に色濃く「場」の要素をもっている組織と言えるだろう。

やっかいなことに、学校は「場」的な空間であるという通念は生徒にも根強くある。どちらかといえば、まじめな生徒ほど本気になつて学校は「場」でなくてはならないと考える傾向があるようだ。このことが生徒間に極端な同調圧力を働かせ、それに少しでも抵抗

イーが新たに形成されることはない。かろうじて、主婦と地元の学校に通う子どもたちだけがいくらか地域に根差す存在ではあったが、それもどちらかといえば学校という「場」の延長上のものだった。

少なくとも都市部においては「場」としての地域社会はほぼ完全に解体している。居住歴の長い住民と、定着率の高い地元商店主、地元中小企業主などによって、かろうじて地域コミュニティらしきものが運営されているにすぎない。それも新都市民にとつては年に二三度のイベントの時だけのおつきあいという場合が多い。

しかし、近年、職場が「場」であることをやめ、それにともない、企業戦士たちが居場所を求めて家庭と地域に三々五々戻ってくる現象が散見される。自由時間の増えたサラリーマンが、それまで見向きもしなかった団地自治会に積極的に参加するようになったり、祭祀にボランティア的に協力したり、子どもたちを集めてイベントをしたり、子どもたちのスポーツ活動を指導したりといった現象である。では、そこで確かな居場所を得た満足感を味わっているかといえば、それはかなり疑問だ。最初は新鮮さを感じても、結局、かつての惣村社会の束縛感を再体験してしまうことが少なくない。地域コミュニティへの積極的な参加が、かつてのような「場」の関

係の復活につながるなら、直ちに例の「ヤマアラシのジレンマ」を体験することになってしまふ。今の我々の感受性にフィットする地域コミュニティの対人関係の距離感を体得するには、さらに若干の時間がかかるだろう。子どもたちを相手にする地域活動ではなおさら慎重になる必要がある。大人たち以上に「場」的関係を苦手とする世代だけに、(世間)育ち世代の大人が不用意に子どもたちを「場」に組織しようとする子どもたちの拒否反応に直面することになる。ヒマになったオトサンたちが、子どもを集めてサッカーチームを作る。なにやら厳しい練習と、ボジションをめぐる競争とで、強い一体感に満たされたチームにしようとすれば、それはオトサンたちのカタルシスにはなっても、子どもたちには迷惑千万ということになる。地域コミュニティの活性化を住民も行政も簡単に口にするが、それが一方的な「場」の復活を志向するものなら、結局は大人たちにも、子どもたちにもストレスを与えるものになり、より深刻な感情的なしこりを残すだけの結果になりかねない。

感のある生徒はいじめの標的になったりする下級生はいつどこでも上級生にあいさつをしななければならぬ、といった習慣は私が中学生だった時代にはなかったが、今ではかなり広い範囲に見受けられる。一部に教師がそれを好ましい習慣として奨励している例もあるようだが、先輩への欠礼に対して制裁が加えられるところを見ると、生徒の方にもそうすべきだという動機が働いていると見るべきだろう。

日本の近代的学校制度が身につけた学校文化は、前に述べたように、惣村共同体から相続した「場」の要素を色濃くもっている。このことは、一方で、例えば教師と生徒の間の関係を親密にし、尊敬と愛情をもつて接すること、効率のよい学校運営に寄与してきたと言える。この効率のよさのため、日本の学校は非常に多岐にわたる機能を果たしてきた。単に国民に必要な知識や技能を身につけさせるだけでなく、道徳的に向上させ、運動能力を高め、課外活動の拠点となり、地域社会の交流センターにもなり、という具合である。しかし、それもこれも、「場」のもつ濃密な対人関係があればこそである。社会全体が「場」的関係を卒業しつつある時、学校だけがひとり「場」を維持することは不可能だ。にもかかわらず、「場」の行動様式に根差す学校文化を維持しようと無理を重ねて

3
地域社会

いる印象だ。そのことが、生徒、教師双方にとつて強いストレスになっている。社会全体の趨勢にあわせて、学校も「場」的な関係清算する方向に行かざるを得ないだろう。学校の基本的機能が社会への適応をスムーズにするということなら、むしろ積極的にそうあらねばならない。同時に、学校の機能を思い切つて整理する必要がある。税収も伸び悩み、高齢者対策にコストがかかる時代には、特に公共サービスとしての義務教育はコスト削減という意味でもそうならざるを得ないだろう。

元禄・享保以来の惣村社会は、高度成長期の人口流出とそれにとまなう都市圏の拡大によつてほとんど致命的な打撃を受けた。惣村社会が弱体化するのと反比例して、職場が「場」を形成するようになり、多くの新都市民が精神的には会社へ帰属し、故郷への帰属意識は次第に希薄になつていった。この時期続々と大都市周辺に開発されたニュータウンは丘陵地帯の山林を宅地化したもので、元々地域コミュニティがないところ、に新都市民は集住した。日本の企業組織にどっぷりつかつた家族がいくら集住したところで、かつての惣村共同体のような強固な地域コミュニティ

4 居場所がないという思い

「居場所がない」というのが一種の流行語になっている。大人も、若者も、そして子どもたちまでこの言葉で心情を表現することがしばしばある。何か事件が起きた時にメディアをにぎわす「識者のコメント」でも使われることが多い。行政機関の文書でも「地域社会の活性化」というフレーズと同じくらい頻繁に使われる。「青少年の居場所作りの一環として」何やら施設が作られることさえある。この「居場所がない」という言葉には、「どこかに自分の本当の居場所があるはず」というニュアンスが込められている。ひどく思わせぶりな言葉だ。

「居場所がない」とはどんなことなのだろう。おそらく、かつての家族像がもっていたような、あるいはかつての惣村共同体を特徴づけていたような一体感を感じさせる対人関係がどこにもない、という意味なのだろう。そういう感覚が、「ひとつ屋根の下」といったひどく古臭い家族ドラマの視聴率を支えていたりする。このドラマのファンも、それが絵空事というのは百も承知の上のこと、本当に自分自身があんな家族関係の中に置かれたら三日ともたないことはよく知っているはずだ。

この「居場所がない」感じの内容は世代に

よって微妙に異なる。昭和二十年代生まれの、いわゆる団塊世代までは、一言で言えば、日本が極端に都市化する以前に育った世代だ。だから、都市化する以前の惣村社会の残り火くらいは体験している。街育ちの人も、街のコミュニティがまだはっきりとした形をもっていたことを覚えていよう。そして、この世代が成長して勤めるようになった会社は、日本の企業組織の全盛期だった。互いに濃密な対人関係にとり結ばれ、相手の気持ちに互いに譲り合い、自己主張よりは和を重んずる。そんな、(世間)の経験をもっている世代だ。

だからこの世代の「居場所のない感じ」は郷愁やノスタルジーと深く結びついている。喪失感や剥奪感と言いつてもいいだろう。リストラ要員になったことをきっかけとして、突如、脱サラして田舎で農業を始めたり、ペンションを経営したりする。若い世代から見ると「無茶するなあ」だけど、本人にとつてはそんなに違和感はない。要は昔に戻るだけのことだ。それが本当にハッピーな選択かどうかは、ちょっと疑問だが。

昨今の若者たちを含めて団塊世代以降の世代にとつての「居場所がない」感じは少し違う。失われたものの復活ではなく、未知の「ユートピア探し」といってもいいだろう。濃密

な(世間)の体験など、もともとないのだ。何か欠落感があるが、その正体が一体何なのかよくわからない。そんなところだろうか。現実には体験がないだけに、一方的にあこがれだけが增幅しているというところもあるかも知れない。何かのきっかけで、居場所になりそうな友達関係ができる。だけど対人関係の体験が乏しいから、ちょっとした気持ちのずれ違いや、感情のもつれを修復できない。なんとなく疎遠になって、別の友達関係を探す。「ベル友」や「プリクラ友達」とはそんなものだ。中高生の友達がいたら、「プリクラのアルバムを見せて」と言ってみるといい。たいていは自慢げに見せてくれる。何十ページにもわたって、無数の小さな顔が並ぶ。圧倒されてちよつと頭がくらくなる。しかし、よく話を聞いてみると、そこにあるすべての相手とはほんの数人に限られる。ほとんどは一度きりのつきあいであつたり、ちよつとしたことで疎遠になつてしまつたりという関係だ。プリクラのアルバムは自分がどれだけ豊富な友人関係の中にあるかではなく、逆に自分がいかに孤独かを確かめる装置になつたりするのではないかと心配になる。しかし、そう思えるのは対人関係についてのテストが(世間)育ち世代のものだからだ。「胸襟を開く」関係こそ友人ということなのだという前提に

立つた見方だ。彼らにとつては、その程度の距離感でも完全な切断状態でさえなければ、十分に友達なのだ。今にして思えば高度成長期は、日本のサラリーマンの黄金時代だった。肩寄せあつて身を粉にして働けば、とにもかくにも安定した生活が営めた。会社も成長し、誰もがそれなりに以前よりは豊かになった。しかし、そのようにして作られた豊かな時代に生まれ育つた世代は、何やら孤独癖めいたものをもつていて、人と肩寄せあうことが苦手だ。群から離れることがさほどリスクではない環境で育つたのだから無理もない。軌を一にして、日本の経済は成長期を過ぎ、効率重視の方向へシフトした。これからは能力主義だという。アフリカの草原で言うなら、シマウマの社会から、ライオンやピューマの社会に移行したわけだ。

「居場所がない」感じは、だから、どこか別のところへ行けば癒されると、田舎生活の始めたりすれば、それを癒そうと、田舎生活の近さにうつつとしさを感じてしまふ。職場でにわかには孤独感を感じ始めたお父さんが、子どもたちを誘ってキャンプに出かけても、なにやらぎくしゃくした雰囲気に出かけてしまふ。二度目は、もう子どもたちもついて来ない。もう、我々には「ひとつ屋根の下」の

ような家族関係はうつとうしくて耐えられない。孤独を癒そうと肩寄せ合えば、互いに傷つけ合うことも避けられないことを知っている。もはや我々は「居場所がない」ことがもたらす孤独感とうまくつきあうことに慣れなければならぬ時期にきている。でも、あまり悲観することもない。この孤独感は何も我々だけのものではないのだ。世界中の、自動車を作ったり、インターネットを使ったりしている程度の産業社会には、つきものの孤独感なのだ。我々はそれを経験するのが半世紀ばかり遅かっただけのことだ。

5 まとめー子どもたちの生活空間のあるべき姿

元禄・享保期以来、我々は「場」という生活空間がもたらす動機づけを利用して高度な勤勉性を得てきた。多少のうつとうしさもあったが、「場」に保護されているという安心感を得ることもできた。高度の勤勉性と安心感の中で働いた結果、非常に豊かな社会が生まれたが、その豊かさは逆に「場」にしがみつかなくても生きていけるという選択を浮上させた。そのため、我々は次第に「場」の濃密な対人関係をうつとうしいだけのものと思ふようになってきた。豊かさが「場」のあり

がたみを色褪せたものにしてしまったわけだ。同時に経済的にも、たとえば「規制緩和」という言葉が象徴するように、「場」の枠組みを超えようという領域にしかフロントアがなくなり、その面からも我々は「場」を否定なしに卒業しなければならぬ時期にきている。子どもたちを取りまく環境も例外ではない。家庭はかつての家長制的な関係とは非常に対照的なルームメイト的な関係に変化した。地域コミュニティは、大都市やニュータウンではすでにほとんどない状態にある。薄味な対人関係の方が快適だという感受性にあわせた変化なのだろう。そんな中で、ひとり学校だけが「場」的な関係を維持することに、時には逆に強化することに汲々としている。「世間」育ちの大人たちでさえ「場」的な関係を卒業しようとしている時に、若い世代にとっては一層うつとうしいものに感じられることだろう。

最近、しばしば耳にする「居場所のない感じ」というのは、このように「場」から切り離された欠落感と、今となってはうつとうしいだけの「場」に束縛される閉塞感とが混然一体となったものと考えられる。

このことは子どもたちにも三つの現象をもたらした。第一の現象は、「場」から切り離されたことで、それまでおのずと「場」から与えられていた「他者からの承認」が満たされ

なくなり、昂進した承認欲求を満たしてくれない関係は独自に探索するというもの。第二は「場」がもっていた動機づけの機能が失われ、何かをするという動機も、何かをしてはならないという動機も生じにくくなったということ。第三は、あらゆる対人関係を切断し、自分の部屋というシェルターに閉じこもるということ。

第一の現象は、中高生を中心に見られるもので、学校でも地域でも家庭でもない場所です。プリクラやポケットベルといった様々な新しいテクニクを利用して新たな友達関係を構築する傾向として現れた。「場」の関心に代わって、acquaintance group の重要性が高まった。この集団の特性は、

- ①偶発性（フアーストフード店の片隅や街角などで偶発的に関係が発生する）
- ②匿名性（本当の自分ではなく、その時々で受けのよい人格が提示される傾向）
- ③流動性（固定的な関係ではなく、常に快適な関係が検索される）

に整理されるだろう。これは既存の生活空間とは無関連な場所に構築されるので、大人からは非常に見えにくく、干渉も届きにくい。いわば「見えないコミュニティ」である。しかし、誰もがここに積極的に参入してくるわけではない。一定のコミュニケーション能力を必要とするからだ。今の時代にあって最

も目立つパーソナリティーで、そのせいかな。今の若者像の典型とされるタイプに限られる。女の子の場合はコギャル・タイプといった方がわかりやすいだろう。援助交際といった現象も、最近になって突然若者たちが性的に放纵になったのではなく、この「見えないコミュニティ」が形成され、そこには当然のことながら、やはり「場」から切り離された大人たちが匿名のコミュニケーションを求めてやってくるということが前提としてあったと思われる。

第二の現象は、例えば日教組の教員集会の報告にあるような「命の輝き」のない子ども像の由来を説明するものと言える。あるいは、酒鬼薔薇事件や連続通り魔事件、あるいは老人やホームレスへの暴力行為など、平気で逸脱行動をとる若者たちの姿を説明している。かつて「故郷に錦を飾る」という動機は、劣悪な環境での過酷な労働に耐えさせたり、戦場で自殺的攻撃に志願させたり、といった非常な強い作用をもった。あるいは「国のおふくろ」をイメージさせることは犯罪者を更正させるのに大いに役だった。何かをするにせよ、あるいは何かをしないにせよ、我々は内面的な動機づけではなく、故郷や家族、あるいは会社などの「場」という外部の力に依存することができた。日本人は世界的に見ればごく例外的に自己決定を免除されてきたのだ。

しかし、「場」から切り離されつつある今、大人も含めて我々は自己決定/自己責任という新しいルールに従わざるを得ないところに来ている。

第三の現象は、見えないコミュニケーションに出ていく能力も気力もなく、かといって逸脱行動に出づかのまのカタルシスを得るといふ選択もできない子どもたちに残されたものだ。あらゆる関係を断ち切り、自分の部屋に閉じこもる。友人はもちろん、家族にもできるだけ顔をあわせないようにして、一人ぼんやりしている。八十年代のオタクという若者像と混同しやすいが、オタクとの本質的な差異は「何もしない」ことだ。オタクは自分の関心のある領域のことには非常に熱心で、コミュニケーション能力は低い、それでも趣味のイベントなどには積極的に出掛けていく。これに対して、引きこもりをする若者は、自分の方から関係を求めることをしない。それだけに、相手の方から関係を求められると無抵抗になる場合がある。積極的に関係を求めてくる宗教カルト、マルチ商法、各種セミナーなどの勧誘に非常に弱いのはそのせいだ。こういう状況に対して、大人たちが「場」の復活で対処しようとする例が見受けられるが、それが有害無益であることは、もはや、述べるまでもないだろう。このような現象を招いたのは「場」から切り離されたせいでも

あるが、同時に「場」の閉塞感に耐えられないせいでもあるからだ。「居場所がない」というセリフを文字通りにうのみにしてはいけない。彼らの言う「居場所がない」は、「よるべなさ」と「うつとうしさ」の板挟み状態に由来するもので、快適な距離感の対人関係がどこにもないという意味なのだ。子どもたちだけでなく、大人たちも、「場」を卒業した後の対人関係の適切な距離感を学習しなればならない時代に我々は生きている。では今の子どもたちにとって居心地のよい環境とはどういうものだろう。それを考えるにあたって、冒頭に述べた「場」の特質を再び点検してみよう。先に「場」の特質をこのように整理した。

- ①付属物（本人の家族など）まで含めた全人格的帰属
- ②単一帰属（複数の「場」に帰属することがない）
- ③内部と外部の区別と両者の間のダブルスタンダード（二重規範）
- ④内部の濃密な対人関係
- ⑤内部に（帰属期間の）序列の重視（中根の言う「タテ社会」）
- ⑥ルールより合意による行動制御

担の大きい環境であることがわかる。しかし、

我々は対人関係をもたずに生きることができないし、何らかの意味での組織を形成せずに生きることもできない。「場」ではない関係の様式を模索する必要がある。

いささか乱暴だが、「場」とは対極にある関係の様式というものをイメージしてみよう。

それぞれの項目の逆を列挙してみる。

- ①部分的帰属（非全人格的帰属）
- ②多重帰属
- ③社会全体の規範がそのまま内部の規範となっていない（規範の一般性）
- ④一定の距離感のある対人関係
- ⑤ヨコナラビの関係
- ⑥ルールによる行動制御

これは、誰もが容易に参入でき、また仮にその中でトラブルを経験したとしても、合理的な解決を得たり、あるいは最終的にはそこから離脱するという選択も開かれているというタイプの関係と言えるだろう。外国人や帰国子女など「境界人」にとっても生きやすい環境とも言える。

より具体的にどういう関係の様式が望ましいのかを論ずることは本研究の領域を超えるが、少なくとも方向性としては、このベクトルに解答をみいだせそうな期待がもてる。このベクトルは我々が三百年もの間慣れ親しんだ「場」とは対極的なものだ。「場」という言葉は、ウチ、ソトを区別する強固な

「一般」の存在を含意する。これに対して、この新しい方向性は、なによりもそういう固い殻のない、いわば軟体動物的な印象を与える。「場」と対比的に言うなら、これは「連」とも呼ぶべきものだ。社会の随所に、様々な機能をもった「連」が構築され、その間を人々が自由に往来していく。「連」は、また、役目を終えれば遠慮なく解体される。一つの「連」に人生のすべてをかけるということがないからだ。このイメージは何かに似ている。我々が「ネットワーク社会」と呼んできたものに非常に近い。ネットワーク社会という言葉は聞くようになって久しいが、単なる「お題目」ではなく、実質としてのネットワーク社会に向けて我々の社会は踏み出そうとしているようだ。

このコンセプトに従って、家庭と地域コミュニティは対人関係のある程度取り戻し、学校は機能削減と学校文化の見直しをする必要があるように思える。

図2 青少年をとりまく「場」の状況

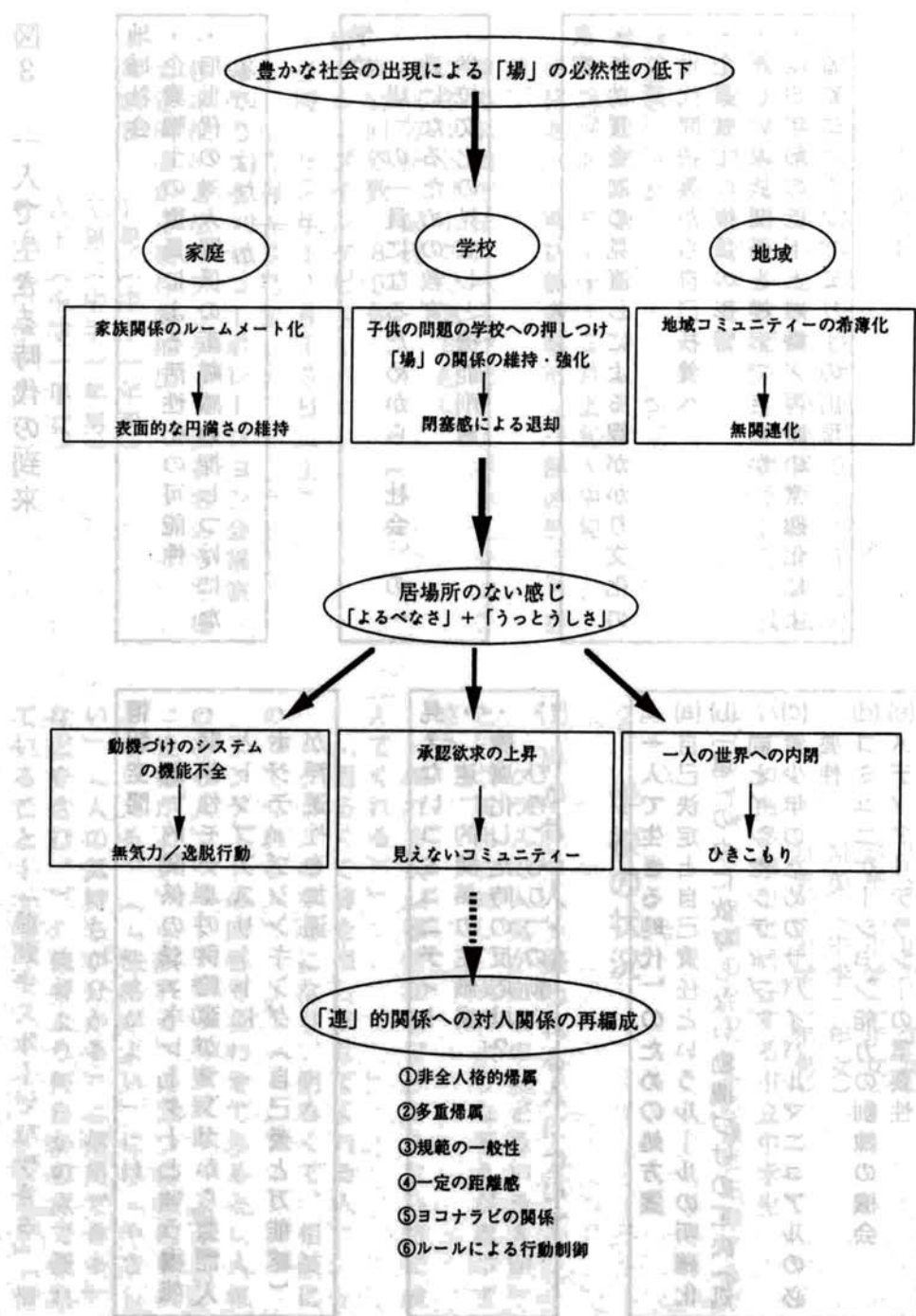


図1 「場」とは何か

■中根千枝の「場」の概念

- ①付属物（本人の家族など）まで含めた全人格的帰属
- ②単一帰属（複数の「場」に帰属することがない）
- ③内部と外部の区別と両者の間のダブルスタンダード（二重規範）
- ④内部の濃密な対人関係
- ⑤内部に（帰属期間の）序列の重視（中根の言う「タテ社会」）
- ⑥ルールよりメンバーの合意による行動制御

【前提としての「空間的な近さの共有」】

■「場」の展開史

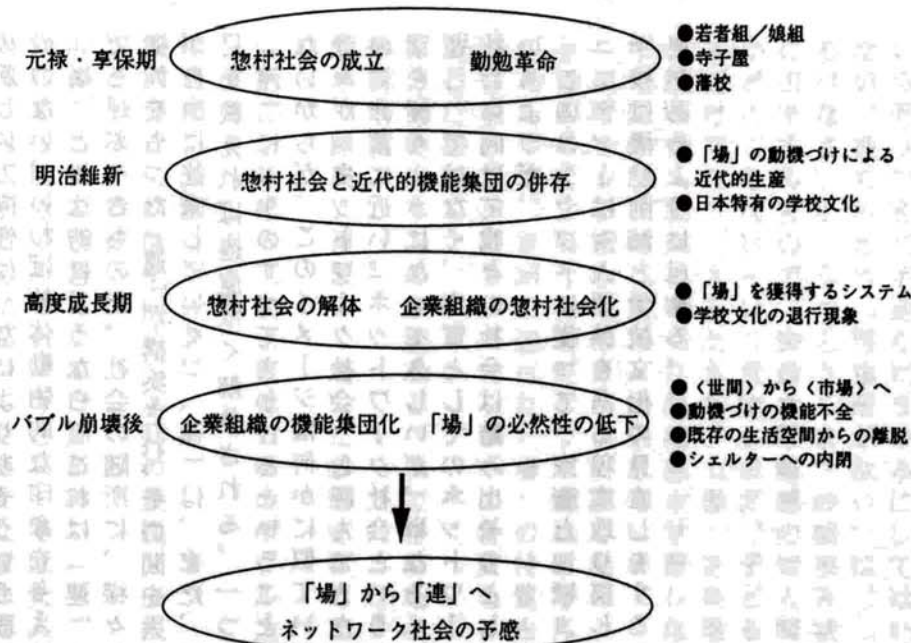


図3 一人で生きる時代の到来

